

V. 研究協議会から

本研究では、所内研究分担者と研究協力校、研究協力者が集まって情報交換・協議を行う研究協議会を、平成 24 年 9 月、平成 25 年 3 月、平成 25 年 11 月に行ってきた。そこでは、前章までに記載した各協力校における取組内容の報告・紹介のほか、以下のような内容が話題となった。

1. 支援システム（実態把握、校内支援体制など）

【実態把握】

- チェックでは拾えないところがあり、それぞれの問題が複雑。
生徒全体に特別支援を行って行こうと考えている。
- チェックシートのようなことで子どもをある程度ソートすることも必要な場合もあるが、生徒一人一人を見ていくことも大事
- 発達障害のチェックリストを取っても、入力と読み取りに時間を掛ける余裕がない。
Hyper Q-U で代替することを考えている。
- 家庭環境が複雑な生徒が増えてきているが、どう入り込んで実態を正確につかんで指導するかが教育の原点。研修はいろいろ実施し、家庭訪問を推進しているが、それでも家庭訪問や三者面談が少なく、かつてあったものが形骸化していることを危惧している。

【校内支援体制】

- 高校は先生方が共通理解をとる時間もないほど忙しい。実態把握をどうするか、共通理解をどうはかるかは大きな課題。書いたものを見てもらう工夫もしているが限界があり、やはり対面で話をするのが大事。支援会議は 45 分時間をとるのが限界で、結論が出ないまま終わることも多い。
- どのようなツールを活用して、ツールで足りない部分をどう人対人で補って、誰がなかだちをするかが非常に大事。
- 高校は案外学級王国という傾向があり、他のクラスの生徒の処分に、他のクラスの教員が意見をさしはさむことが難しい。
- 学年間、教科間、組織間の障壁を少なくするのが特別支援コーディネーターの役割。
生徒指導担当と特別支援教育コーディネーターは、消極的生徒指導のところで意見がだいたい対立するが、特別支援教育コーディネーターの発言力をもう少し高めるには、ある程度役割をトップダウンで明確化するとともに、授業を軽減されたうえでの配置等の教育委員会からのバックアップが必要。鑑別所との連携等々、一人で全部はできないので、チームでやっていくためのバックアップも必要。

- 特別支援員が単年度予算で配置されている状況では、関係や知見が積み上がらない。学習のみの遅れであれば学習支援員も使えるが、必ずしもそうではない。
- 支援の必要な生徒が複数いる場合には、国語、英語、数学など、普通の授業におけるTTのような仕組みがあると良い。
- 保護者からの「スモールステップを踏むことがこの子にとっての車椅子」という言葉がしっくりきた。教員にいかに理解してもらうかが大事。

【学校外も含めた支援体制】

- 高校と特別支援学校の校長会は別々にやってきたが、校長連絡会に特別支援学校も入り、特別支援の在り方について、特別支援学校の校長が提言する研修も行っている。
- 特別支援学校の教員と高校の教員の人事交流をもう少し活発にしようという動きがある。
- 愛知県内を18地区に分け、地区別コーディネーター研修会を実施している。地域との連携もあるので、核となる特別支援学校とのノウハウの連携を進めている。ほんとうに困った事例を出して協議を行っている。

【外部人材の活用】

- 高校の教員は批判を恐れて、外部人材を入れることをいやがる傾向にあるが、学校関係者でない人材でないと引き出せないものもある。エレキギターの演奏者を呼んで図書室で恋愛相談等行ってきた。
- カウンセラーとは連携できたが、外部人材の活用は難しい。
- 特別支援教育巡回支援員を活用し、支援員によっては研究のスーパーバイズもお願いし、理解促進に効果をあげた。
巡回支援は、年20回ぐらいの派遣。特別支援学校の教員が同行し、巡回支援の合間をつなぐ特別支援学校の教員のスキルの向上にもつながった。
また、県教育委員会の指導主事が巡回に同行することで、学校と教育委員会が一緒にアドバイスを聞くことにより、あとの対応がうまくいった。
「悩んでいる担任に助言」から、どう校内委員会への支援に広げていくかがポイント。
学校側に巡回支援員の役割を正しく理解してもらうため、コーディネートする人が必要。
- 特別支援学校の先生が高校を支援するには、まだまだ専門性の向上が必要。
- 特別支援学校のコーディネーターにとって、高校生は一つの場面を見ただけではわからないので、高校は敷居が高いという。精神疾患等がからんでいるケースもあるので、ケースが非常に難しいとも。そういう意味では、特別支援学校の教員を支える研修も必要。
- 高校と特別支援学校のスタッフが仲良くなると、案外「一緒に考えよう」でうまくいったりもするため、県でお見合いパーティーのような取組を行っている。小中学校ではそういうことをして人間関係ができてきたことを踏まえての実施。
- 特別支援学校のコーディネーターに向いているのは「何かをしゃべってこよう」という

人でなく、やっていることをみて「ああいうことは役立ちますよね」と言って来られる人。人間関係を築きやすい。

【管理職】

- 高校を対象に支援が必要な生徒の調査を行うと、学校によって、たくさんあがってくる
ところと、支援が必要な生徒が多数いると思われるのに数名しかあがらないところがある。
管理職中心に理解啓発をし、危機感をもってもらいたい。
- 頑張る先生も、孤軍奮闘になると空しく、疲れてくる。管理職が頑張って、組織的に取
り組もうとすると、先生も元気になる。
- 私学は理事長校長が増えており、理事長はこういう問題があることをあまり知らない傾
向にある。

2. 指導・支援の工夫（授業づくり、教育課程、学習評価など）

【丁寧な指導】

- 大人数の集団にマイクでいっても全く伝わらず、個別に指示しないと伝わらない生徒が
いる。中学校の通常学級でも、たとえば自分の住んでいる町名がわからない生徒もかな
りいる。指導に際してはそうしたことも考慮しなければならない。
- 廊下で座り込んだり寝そべったりしている生徒がいたら、絶対そのまま見過ごさない
というルールを徹底している。
事情を聴き、生徒が嘘をついても、どうして嘘をつくのかその事情を考える。
その事情がわかると、他の先生に話さずにはいられなくなり、そこから生徒に対する肯
定的な見方がでてくるようになると、学校のありかたが変わってくる。
- 特別支援が必要な生徒が多い学校に限らず、進学校でも、特別支援的な考え方で取り組
むととてもうまくいくことがある。ほんとうはどの子どもも支援を求めているところ
があると気づいた。

【指導の場】

- 福岡県の私立学校では、4か所に学習支援センターを設置し、不登校の生徒の学習の場
としている。不登校の生徒の半数ぐらいは発達障害がある生徒。
主要5教科の先生とカウンセラーを配置し、一時的にここで学習し、在籍校に戻る。戻
れない場合は転校する。私立学校の生徒向けであるが、県費をつかっているの
で、県立高校の生徒も受け入れている。ピーク時には4か所あわせて150～160人の生徒が通
っていて、その半分くらいは学校に復帰する。そのような場も必要では。
- 中間テストで学力面での支援が必要な生徒には、「ゼミナール」という名称で、放課後に
学習の機会を設けている。大学生を招いて学習の支援をしてもらい、生徒同士でも教え

合う。経済的に厳しい家庭の生徒が多いため、学習塾に行ったことがなく、大学生のお兄さんとお姉さんと勉強をする、ということ残って学習に取り組む。

【個別の指導計画】

- 研究指定校で「個別の指導計画の作成・活用」に取り組んだところ、4校とも作成の経験がなかったため、作ろうというところまで1年間かかった。
支援策を実際にやってもらって「やってみましたカード」に書いてもらうという取組を行い、夏休みには全体研修会を実施して、全校の先生方に報告を行った。
職員が多く、非常勤職員が多いため、共通認識をもつことが困難。
カード等のツールは作ったが、結局はコーディネーターが配って歩いて「よろしくね」とお願いする人と人のつながりが重要であった。主幹教諭がコーディネーターになっていると、お願いがしやすい等のメリットがあった。
- 校務が忙しいのにほんとに個別の指導計画をほんとうにつくるのか、という声がある。
できるだけハードルを低くしながら、ポートフォリオを手掛かりにしつつ、ケース会議等で把握していった。シート（気になるカード、やってみましたカード）はとても役に立つのでは。具体物があると良い。
- 個別の指導計画については、担任がつくるのか、という議論から始まり、続きそうになかった。教科は教科で、指導歴のようなシートを作る方が効果的ということになった。
一人の先生が全て教えるわけではないので、役に立つのは指導歴。

【コミュニケーション力】

- かつては先生方のコミュニケーションがさかんで、どの先生も生徒の強み・弱みがわかっていたが、今は校内の情報共有ができにくくなっている。
子どものコミュニケーション力が弱くなったという議論あるが、それを高める指導は学校でやるしかない。どう意図的に関係づくりをするかという発想が学校に弱い。
- 教員のコミュニケーション能力は非常に問題になってきている。
家庭的に十分でない生徒も多く、社会人としてのモデルは身近にいる教員に求めるしかない。教員同士の仲の良さを生徒に見せることは、生徒が就職したときの同僚との接し方のモデルにもなるため意義がある。教員で揃いの学校ポロシャツを持って、行事等のときは全員で着て仲の良さを示す等の工夫をしている。

【自己理解】

- 生徒の自己理解が進んでいないことが課題。
特別支援ではよく自己理解して次のステップにといわれるが、どのように自己理解までいかせるかが難しい。将来大変そうな生徒も、本人・保護者が全く困っておらず、支援が入っていかない。「不得意なところはここじゃないの？」と提示しても、納得しない。

【評価】

- 例外を乱発すると混乱するため、1学期の中間テストで予防線をはる。そこからそのなりに努力して向上してきたストーリーが他の生徒にも説明できる証拠がたくさんあると、学校がこわれな。生徒の方がわかっている「あいつなんとかしてくれよ」と言ってくる。
- 相対評価しかなかったところに、観点別評価や、子どもが何を頑張ればいいのかわかる評価、個人内評価を重視していくということを浸透したいと考え、研修等をしている。

【授業研究】

- 養護教諭が授業を見回りに行き、授業に入ったりしている。
- 授業研究では、授業の良いことのみを言い合うようにする。ことさらに「改善しよう」ということはしていないが、結果的に改善していく。
先生は撮影せず、生徒の様子だけを映した授業のビデオを見ながら授業研究を行うと、生徒の表情がよくわかり、「ああ言うと寝てしまう」等、いろいろな意見交換ができる。いい授業を見ると、真似しないとそんだという気持ちになる。
大変な生徒がいて、授業で立ち往生すると、他の教員が助けに入る学校の雰囲気であり、他の先生が授業に入ってくることに抵抗はない。
- 各教員レベルでは工夫をしているが、教員間で共有するための取組が課題となっている。
- 高校の教員が中学校の授業を見に行く取組をしている。
在籍している生徒が中学校レベルの学習も3～4割の達成度なので、生徒の躓き理解するうえで、また授業での指導方法のヒントを得る上で参考になった。
特別支援の教材をみせてもらうこともできた。
- 高校のレベルが違くと、授業を相互に見合うことは無駄だと思われる。
- 研究で外部専門家から特別支援教育の観点からの助言を受けたが、これまで積み上げた教科の専門性や授業のやり方を否定するものではないと受け止められ、教科を超えた授業の工夫が出てきた。
- 小学校では授業を見合うことがあたりまえのことであるが、中学、高校になると、よその教科の先生に口をはさまれたくないという意識が強い。巡回支援員や、中学校の教員等、高校の教員以外の人材のほうが受け入れられやすい。自分の授業に直接触れられないなかで、自分たちの授業を見直すきっかけがあるといい。
- コーディネーターが別の教科の先生にものをいいにくい。同じ教科の先生はコーディネーターを盛り立て、その教科だけは深まるということがあったりする。

【授業評価・アンケート】

- 授業の改善に向けたアンケートは実施している。しかし、必ずしも次年度の授業改善につながらない。

○県では、授業評価のチェックリストがあり、それを実施しているが、実際に授業改革までには至らない。困難校では成果が上がらないことが「生徒の問題」になってしまう。また、アンケート等を実施しても、データの収集と処理、読み取りが難しい。

【特別支援的観点のある指導の継続】

- 学校に新しく着任した先生には、生徒の状況を丁寧に説明している。
- 3年程度で人事異動によって学校組織が変わっていくと、風化してしまう傾向がある。
- 「〇〇高校スタイル」というものを作って、職員の異動による共通意識の形成維持に工夫をしている高校もある。

【生徒指導との関係】

- 生徒指導案件が非常に多い。原因があって結果があってということ、経過としてとらえるのではなく、両当事者の特性、家庭環境等をからめて実態把握から進めている。生徒指導は特別支援教育の第一歩ととらえている。
- 生徒指導でどれくらいカウンセリングをしているかが大切。
えこひいきで教員の関わり方を変えると良くない、全員に同じように関われば良い。学校長のリーダーシップで、硬直的な対応を改めることも効果的。
マイナス面が目につくということあるが、関わり方で積極的になる子どももいる。
教員の関わり方が変わらなければ、生徒の変化に対応できない。
- 生徒指導も学習支援という大きいコンセプトでするとなると、教育相談的ノウハウを取り入れた方が、事件を通じて学習できる。
進路指導も、わからない未来に向けて何をするかというかなり高度な学習。そのなかで教科指導を行って行くべき。進路の問題、生徒指導と分けなくて、その子がどういう学習をするかという観点をもつ必要がある。
- 生徒指導は問題行動対応だけでなく、究極の目的は、自己指導能力を身につけること。他者の視点ももって行動できる生徒を育てること。
生徒指導には「問題行動対応」「未然防止」「健全育成」があり、「健全育成」は忘れられがちである、とても大事。
授業の中でも規律の指導や、自立性、自発性を高める指導など、生徒指導の要素がある。問題行動対応だけでなく、授業を中心とした支援に、生徒指導もすっぽり入る。
生徒指導の中で発達障害をどう扱うか、簡単なリーフレットが国立教育政策研究所ウェブサイトに掲載されているので（<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/#leaf01-03>）、参考にさせていただければ。

3. 支援の連続性（中高連携、キャリア教育など）

【中高連携】

- 中学校から情報が得られないケースがある。中学までは、問題を起こしたくないから、あまり保護者に働きかけしてこなかったのでは、とも考えられる。
- 中学校と高等学校の間では、日頃からの接触回数が多くなって初めて重要な情報があがってくる。接触がない人には情報は渡せない。一緒に勉強する機会を設けることが有用。
- 中学校では、調査書以外の情報は要求がない限り高等学校に渡していない。
中学校で勤務した 10 年間、高校の先生から電話があったのは 2 回だけで、問い合わせがこない現状がある。聞かれてもいないことを伝えるのは困難。
- 保護者からは、高校入試の配慮に関する情報や、高校から先どういう支援を受けられるのかが見えにくいという。中学校への情報提供ともかかわる問題。
- 夜間定時制高校での勤務していた間、入試が行われる事前の相談は受けなかった。合格後、中学校に聞いて回る。夜間定時制の生徒はいろいろな問題を抱えており、面接の受け答えがうまくいかない、入試の席は扉の近くがいい等申し出て、いらぬ負担を減らしたほうが良いのに、言ってもらえない。
- 高校進学の際、いろいろな選択肢はあるが、なかなかジャストミートな選択肢にたどりつけない現状がある。
- 障害者手帳をもっている生徒が夜間定時制高校に入り、障害者手帳が取れない生徒なのに特別支援学校に入った、ということがあがるが、そうした生徒達が 5 年後、どうなっていくかが心配。
- 高校合格がゴールという意識が強い。普通科にこだわる保護者が少なからずいる。
- 中学のコーディネーターの先生は「高校にあげてからのことを考えていませんでした…」という本音をもっていたりする。
高校合格から、自分の将来をどう考えるかも含め、どう考えていくべきかが大切。

【小中連携】

- 小学校ではあまり問題にならなかったことが、中学校では大きな問題になる。
小学校は、対人面のつまずきは伝えようとするが、小学校では面倒見のいい先生ほど、学習面のつまずきは問題にしない。中学校になると、学習のつまずきが非行等につながっていく。

【キャリア教育】

- 経済的に厳しい家庭の生徒は、無給のインターンはいやがり、有給のインターン「バイトーン」から就労につながることも結構ある。
- 最終的には、生徒がひとりひとり社会の一員として活躍していくのが目的。

キャリア教育も変わっているが、4つの能力、8つの領域については生きている。
発達障害の生徒は、どうしてもコミュニケーション能力不足であるため、そういう力をつける授業が必要。

コミュニケーション能力が欠けている生徒が看護師になりたいという場合、これまで教員は、どうやってあきらめさせるかと考えがちだったが、これからはあきらめさせる時代ではない。看護師をめざすなかで、コミュニケーション能力がこれだけついたから、こういう職業が選べるようになった、等の成果が得られる指導が望まれる。

○大学と連携した学校もあるが、就職になると難しい。

特別支援学校にノウハウを期待したが、知的障害の手帳を使っての就労のノウハウはあるが、高校に伝えられるものはなかなかない。

○高校は自信をつけにいくところ。自分はものにさわってモチベーションが上がるか、座学で頑張れるか等によって、自分に合った学校を選択すべき。中学校の総合的な学習の時間で、高校ではこうなる、ということを伝えていくことが大事。

○高校では生徒の人間模様までわかるので、教員がそれに応じた声掛けをすることができるが、社会に出て厳しい扱いを受け、つぶれてしまう生徒がいる。就職や進学をした先で1年間続かない等。

○面接指導等をして就職が厳しいとわかっている生徒については、地域の授産所と連絡し、保護者の了解を得て作業実習などをして、就職する等しているが、教員個人のとついでやっていると、教員の人事異動があった後、同様にできるかわからない。

○キャリア教育としてやることもしっかりやる一方、授業の中でどう生き方を考えさせていくか、授業も生徒指導的な側面をみんなが見据えてやっていく必要がある。

教科の論理は重要だが、生徒が将来を見据えて頑張ろうという方向にどうもっていけるか。

【指導の連続性】

○高校では、社会的基礎力の指導がはじまっている。

指導について中高の連携が必要。

(小松 幸恵)